

錢形平次捕物控

朱塗の筐

野村胡堂



「親分、美しい新造が是非逢わしてくれって、来ませ
たぜ」

とガラツ八の八五郎、薄寒い縁にしゃがんで、柄
にもなく、お月様の出などを眺めている銭形の平次
に声を掛けました。

平次はこの時三十になったばかり、江戸中に響い
た捕物の名人ですが、女の一人客が訪ねて来るの
は、少し撥くすぐつたくみえるような好い男でもあつたの
です。

「なんて顔をするんだ。——どなただか、名前を訊
いたか」

「それが言わねえ」

「何？」

「親分にお目にかかつて申上げますって、——滅法
美しい女だぜ、親分」

「女が美しくつたつて、名前もおつしやらない方にお
目にかかるわけには参りません、と言つて断つて来

い」

平次は少し中つ腹だつたでしよう。名前も言わ
ない美しい女と聞くと、妙に頑固かたくなことを言つて、ガ
ラツ八を追つ払おうとしました。

「悪者に追つかけられたとか言つて、蒼い顔をして
いますよ、親分——」

「馬鹿ツ、何だつて冒頭はなつからそう言わないんだ」
平次はガラツ八を掻き退けるように、入口へ飛出
して見ました。格子戸の中、灯あかりから遠い土間に立つ
たのは、二十三——四の年増、ガラツ八が言うほど
の美しい縹きりょう織ようではありませんが、身形みなりも顔もよく整つ
た、確しつり者らしい奉公人風の女です。

「お前さんか、あつしに逢いたいというの？」

「あ、親分さん、私は悪者に跟つけられています。ど
うしましょう」

「ここへ来さえすれば、心配することはない。後ろ
を締めて入んなさるがいい」

ただならぬ様子を見て、平次は女を導き入れまし
た。奥の間——といっても狭い家、行灯あんどんを一つ点
けると、家中の用が足りそうです。

「親分さん、聞いている者はありませんか」

「大丈夫、こう見えても、御用聞の家は、いろいろ細工がしてある。小さい声で話す分には、決して外へ洩れる心配はない。——もつとも外に人間は二人居るが、お勝手で働いているのは女房で、今取次に出たのは、子分の八五郎というものだ。少し調子つ外れだが、その代り内緒の話を外へ洩らすような気のきいた人間じゃねえ」

平次は碎けた調子でそう言つて、ひどく硬張つている相手の女の表情をほぐしてやろうとするのでした。

「では申上げますが、実は親分さん、私は銀町の石井三右衛門の奉公人、町と申す者でございますが」

「えッ」

石井三右衛門といえ、諸大名方に出入りする御金御用達、何万両という大身代を擁して、町人ながら苗字帯刀を許されている大商人です。

「主人の用事で、身にも命にも代え難い大事の品を預かり、仔細あつて本郷妻恋坂に別居していらつ

しやる若旦那のところへ届けるつもりで、そこまで参りますと、予てこの品を狙っている者の姿を見掛けました。——いえ、逢つたに仔細はございませんが、——私の後を跟けて来たところを見ると、どんなことをしてもこの品を奪い取るつもりに相違ございません」

お町は、こう言いながら、抱えて来た風呂敷包を解きました。中から出て来たのは、少し古くなつた桐柢の箱で、その蓋を取ると、中に納めてあるのは、その頃明人飛来一閑という者が作り始めて、大変な流行になつて来た一閑張の手篋、もとより高価なものですが、取出したのを見ると、虞美人草のような見事な朱塗、紫の高紐を結んで、その上に、いちいち封印をした物々しい品です。

「フーム」

銭形の平次も、妙な圧迫感に唖るばかりでした。石井三右衛門の使いというのが一通りでない上、朱塗の一閑張の手篋で、すっかり毒気を抜かれてしまったのでしよう。このお町とかいいう確り者らしい年増の顔を、次の言葉を待つともなく眺めやるので

した。

「ちよつど通り掛つたのは、お宅の前でございませう。捕物の名人と言われながら、滅多に人を縛らないという義に勇む親分にお願ひして、この急場を凌しのごうとしたのでございませう。後先も見ずに飛込んで、何とも申し訳わけございませぬ」

お町は改めて、嗜たしなみの良い辞儀を一つしました。

「で、どうしようと言うのだえ、お町さんとやら」「この様子では、とてもこの手篋を妻恋坂までは持つて参れませぬ。そうかと言つて、このまま引返すと、一晚経たないうちに、盗まれることは判り切つております。御迷惑でも親分さん、ほんのしばらく、これを預かつておいて下さいませぬでしょうか」

「それは困るな、お町さん、そんな大事なものを預かつて万一のことがあつては——」

平次も驚きました。命がけで持つて来たらしいこの手篋を、そんなに軽々しく預かつていいものかどうか、全く見当も付かなかつたのです。

「親分のところへ預かつておいて危ないものなら、

どこへ置いても安心なところはございませぬ。どうぞ、お願ひでございませう」

折入つての頼み、平次もこの上は没義道もぎどうに突つ放せそうもありません。

「それは預からないものでもないが、少しわけを話して貰おうか。中に何が入つてるか見当も付かず、後でどんなことになるかもわからないようなことでは、どんなに暢のんき気な私あつしでも心細い」

「それでは、何もかも申上げましょう。親分さん、聞いて下さい、こういうわけでございませう」

二

石井三右衛門というのは取つて六十八、配偶つれあいは五年前に亡くなりましたが、たつた一人の倅せがれ三之助は、年寄りつ子の我儘わがまま育ちで、悪遊あくゆうびから、とうとう勝負事にまで手を出すようになり、金看板のやくざ者になつて、三年前に久離きゅうり切つて勘当され、二十五にもなるいい若い者が、妻恋坂の知り合ひの二階

に為すこともなくゴロゴロ暮しているのです。

銀町の店には、養い娘のお縫ぬいという十九になる女と、手代ともなく引取られている甥おいの世之次郎よのじろうとが、年寄りの世話を焼いておりますが、どちらも財産目当ての孝行らしくて、三右衛門の気には入りません。

大番頭は禄兵衛ろくべえといって、名前の通りむつかしい四十男、これは三右衛門に代つて店の支配をし、大勢の奉公人を取締つておりますが、正直一途で、金儲けや商売のことにかけては、鬼神きじんのような男ですが、家の中の取締りはあまりよく行き届きません。

三右衛門の力と頼むのは、十三の年から足かけ十二年奉公したお町ただ一人だけ、これは赤の他人ですが、それだけに、財産に目をくれるでもなく、昔の人達にはよくあつた本当の主人思いで、半身不随で寝たきりの三右衛門を、自分の親のように世話をしていたのです。

身代は少なく積つても十万両。支配人任せで寝ている三右衛門は、力になる身寄りが無いだけに、その始末が苦になつてなりません。自分の生きている

うちは、どうやらこうやらやつて行くが、明日も知れぬ病身になつてみると、せつかく築き上げた大身代を、甥や養女や、赤の他人に、熊鷹くまたかに餌えさを奪われるように滅茶滅茶にされてしまうのが心外でたまらなかつたのです。

そうかといつて、今大急ぎで養子を迎えることもならず、生命いのちの灯ともしが次第に燃え尽きるのがわかると、勘当した倅こが、つくづく恋しくなつたのも無理のないことでした。

しかし、一旦久離切つた倅の三之助を、死際しがいにこつちから呼び戻すというのも、昔氣質むかしがたぎの三右衛門には出来ず、番頭も甥も、出入りの者も気が付かないのか、気が付いても、わざと知らん顔をするのか、口を噤つぶんで、そのことには触れてくれませんか、病身の三右衛門には、どうすることも出来なかつたのでした。

我慢が出来なくなつて、呼寄せたのはお町。

「俺が目を瞑つぶれば、この身代は滅茶滅茶だ。他人に筆むしり取られてしまうくらいなら、——これは内緒の話だが——やくざでも血を分けた倅こに費つかわれた方

が、どんなにいい心持だか知れはしない。俺に万一のことがあったら、用筆筒の中の朱塗の手篋を、中味ごとそつと妻恋坂の俵へ届けてくれ。その中には諸大名を始め、江戸中の大商人に貸した金の証文が一杯入っている。どんなに下手に現金を掻き集めても、五万両や三万両にはなるはずだ。店の有金は、禄兵衛始め奉公人達にくれてやってしまい、土地と家作は、娘と甥に半分ずつやるように、これは別に、遺言状を書いておく」

こう言い含めたのは、ツイ三日前、その翌る日は三右衛門、二度目の中風に当つて、正氣を失つたまま、昏々と睡つてばかりいるのです。

こうなると、家の中にはもう、前々から孕んでいた財産争いが具体的になつて、明日をも知れぬ重病人を抛つておいて、現金や貸金の勘定に夢中になる有様、朱塗の手篋の証文も、いつ誰に見付けられて、奪い去られてしまうものか、全く油断も隙もありません。

お町はこう言いながら、もう一度手篋を平次の方へ押しやりました。

「そんなわけで、今晚という今晚、甥の世之次郎様が、旦那様の枕許の用筆筒へ手を掛けなすつたので、たまり兼ねて持ち出しました。旦那様は二度目の中風でございませから、お癒りになるものやら癒らぬものやらわかりませんが、道々考え直してみると、まだ亡くなつたわけでもないのに、あわててこの手篋を持ち出したのは、少し早すぎたのかもわかりません。——若旦那の三之助様は、それはそれは荒つぱい方でございませから、証文をどうかしてしまつた頃、旦那様が正氣に還つたりしては、私の申し訳も立ちませせん。そうかと申して、外に願ひするような身寄りもなし、ここへ飛込んだのを御縁に、どうぞしばらくこれをお預かり下さいませんか」

平次もしばらくは言葉もありませせん。

大抵のことには驚かないように訓練を積んでいますが、夢にも見たことのない五万両三万両という大金の証文を、こんな浅まな家に預かることを考えると、さすがに穩やかな氣持ではいられなかつたのです。

「驚いたな、お町さん、私もいろいろの目に逢ったが、石井三右衛門ともいわれる大金持の身上を、まると預かるようなことになろうとは思わなかつたよ」

「それが、親分さんの信用でございませう。あまり遅くなると店の方が面倒になりますから、これでお暇いたします。それではどうぞ」

「まあ、どうも仕様があるまいが、お前さんはどうするつもりなんだい」

「私はこの桐の空篋だけ持つて、妻恋坂へ参ります」「危ないじゃないか、引つ返しなすつたらどうだい」「いえ、若旦那の三之助様に親御のお心持も伝え、それに、中味は親分さんに預けてあることも申さなければなりません」

「なるほど」

「それから、私の後から跟けて来たのは、石井家の身上を狙う悪者に相違ありませんが、誰が本当の悪者なのか、私にもまだ見当は付いておりません。この空篋を囷おとりにして、そいつの顔が見てやりとうございませう」

恐ろしいきかん気、平次もさすがに、この男まさりの女の顔を眺めやるばかりでした。

「そいつは危ない。いくら宵のうちでも、間違いがあつたらどうするんだ。ゴロゴロしている野郎があるから、そこまで送らせよう」

「いえ、親分、そんなことをしたら、曲者は姿を隠してしまいます。私一人なら、馬鹿にしてこの篋を取る気にもなりません」

「そう言ったつて」

「こんなに見えても、私は思いの外力がございませう。小男の世之次郎さんなどには負けることじやございませぬ。ホ、ホ、ホ」

「そいつは豪儀だが——」

平次が心配するのも構わず、赤い手篋を置いたまま、お町はいそいそと街の月の中へ飛出してしまいました。

「ガラッハ」

「ハエ」

「聞いたか」

「聞きましたよ。驚いた女があるものですね」

「手筐を預かつてみると、俺が飛出すわけにもいくまい。手前てまえすぐあの女の後を跟けて、御苦労だが妻恋坂まで見届けてくれ。途中でへマをして、曲者にさだ覚られるようなことをするな」

「大丈夫ですよ、親分。このお月様だ、相手の女が、五六町離れて行つたつて匂いでも解りまさア」

「いやな野郎だな」

「へッ、へッ」

ガラツ八は草履を突つかけると、それでもそ、そ、そ、きとお町の後を追いました。明神様の方へ――。

三

「親分、た、大変」

「何が大変なんだ、騒々しい」

飛んで来たガラツ八。格子戸へ一ぺん鉢合せをしてハネ返されて、それからまた開けて、バアと顔を出しました。

「落着いていちやいけねえ、すぐ来て下さい」

「どうしたんだよ」

朱塗の手筐は、早くも仕舞い込んだ平次、十手を懐へネジ込むと、裾をつまんで、サツと外へ出ます。まことに慣れた手順で、一分一厘の隙もありません。

「あの女が殺されたんだ」

「何？」

「明神様の裏の闇へ入ると、妙な物音がしたつきり、一向出る様子はねえ。駆け付けてみると、喉笛のどがえを切られて、血だらけになつてブツ倒れているだらうじゃないか」

「箱は？」

「奪とられてしまつたらしいよ、親分」

「曲者は？」

「まるで見当が付かねえ。二三十間けん遅れて行つたあつし、が、駆け付けると右の通りだ。逃げる間も何にもねえはずだが、犬つころ一匹飛出さなから不思議だろう」

「手前が間抜けなんだよ、急いで行けッ」

「息が切れてかなわねえ」

「死体はそのままにしておいたのか」

駆けながらも平次は、出来るだけガラツ八の口から要領を引出して、事情の外形アウトラインをはつきりさせようとする様子です。

「通りかかった町内の人に頼んで来たよ」

「町内の人とは、どうして判った」

「懐手ふくじでをして立って見ているんだもの、町内の人だろう」

「……………」

現場へ行つてみると、もう五六人の人が立って、騒いでおります。木立と建物の蔭で、月の光もここまでは届きませんが、近所から持出したものと見えて、提灯ちようちんが二つ、街の土に仰反のげぞつて、血の海の中のこと切れているお町の死体を、気味悪そうに覗いております。

「御町内の方、掛り合いでお気の毒だが、しばらく動かずにいて下さい」

平次はそう言いながら、提灯を借りて、お町の死体を見入りました。後ろから喉笛を切った時、下手人の顔を見るつもりで少し顔を反そらしたらしく、傷

は少し左へ外それておりますが、そのために頸動脈けいどうみやくを切られて、ひとたまりもなく死んでしまった様子です。

仰向けあおむに倒れているところを見ると、たぶん手篋を奪い取るために引倒したのでしよう、お町の手は、それでも見覚えの空風呂敷ひしを袴つかと掴んでおりますが、中の桐箱はその辺には見当りません。

——中を開けたら、曲者もさぞ驚いたろう——平次はツイそんな気持になりましたが、そのまま提灯を上げて、死体を取囲んだ五六人の顔を順々に照らして行きました。

「八」

「へエ」

「この中に、お前が最初に、死骸の番を頼んだ人がいるか」

「親分、いませんよ」

「本当か」

「本当ですとも、小作りで、——暗くて解らなかつたが猫背の男でしたよ、どうも不思議だ」

「何が不思議なものか、それが下手人だったのよ」

「えッ」

「馬鹿だな、相変らず、——お前は先刻、二三十間駆け付けるまでここから逃げ出した者はないと言つたろう」

「へエ——」

「外に隠れる場所はねえ。急場の思い付きだ、たぶん一度隠れたその扉の間から、暢気のんきそうに懐手をしてノソリと出て来たろう」

「そうですよ、親分。まるで見ていたようだ」

「町内の人のような顔をして逃げたんだ。恐ろしく落着いた野郎だ。年恰好、人相、着物などを見なかつたか」

「それが親分、下手人と解れば見ておいたんだが——」

「仕様のねえ野郎だな」

「でも、猫背とわかつているんだから、これはわけもなく見付かるぜ」

「フーム」

「ね、親分、石井一家のうちから猫背を探しやアわけはねえ、行って当つてみましょうか」

ガラツ八はすっかり得意になりました。本当に飛出しそうにするのを、

「いよいよ馬鹿だなア、女から奪とつた箱はどこへやったか、お前にも見当は付くだろう」

「その辺の藪やぶへでも捨てはしませんか、どうせ、空っぽと解れば」

「空っぽだつて、箱に仕掛けがあるかも解らないだろう、人まで害あやめて奪つた物を、そう易々と捨てるものか」

「すると」

「お前が駆け付けるまでに、背中へ背負しよつたんだよ」

「えッ」

「とんだ猫背さ。行って聞いてみるがいい、銀町にはそんな者は一人もないに相違ないから。——町内の人はみんなスラリとしているぜ」

「へエ——」

平次の明察、掌たなせいを指すようなのを聞いて、驚いたのは立会いの衆でした。

「銭形の親分だぜ」

「そうだろう、そうでもなくちや——」

と言つた囁きを聞くと、

「皆さん、どうか、お引取り下さい。とんだ御迷惑でした。それから町役人にそう言つて、ここへ来るように言伝ことづけをお願いします」

平次はもう野次馬を追つ払います。

「さア、こんな所に立つてしていると掛り合いになるぞ、帰れ帰れ」

ガラツ八は急に強くなります。

しばらく、提灯ちようちんの灯で、その辺を探していた平次は、やがて道の上から剃刀かみそりを一挺拾い上げました。

「親分、好いものが手に入ったネ」

「フム、あまり好すぎるよ」

かなり使い込んだ剃刀、柄えを観世かんぜで巻いて、生波きしぶを塗つてありますから、ひどく特色のあるものです。が、不思議なことに、大して血が付いてはおりません。

「親分、何を考えていなさるんだ」

「可怪おかしなことがあるよ、新しい齒おこぼれのあるところを見ると、剃刀で切つたには相違ないが、一度血を拭いて、仕舞い込んで、また落したのはどうい

うわけだ。——余程あわてたのかな」

「……………」

「箱を背中へ入れて、お前をかついだ様子じや、下手人はよほど胆のすわっている男らしいが——」

平次はいつまでも剃刀を睨にらんで頸くびを捻ひねつておりますが、さすがにこの謎は解けそうもありません。そのうちに、急を聞いて、町役人が、一隊の野次馬と一緒にやつて来ました。

四

石井三右衛門いしゐさんゑもんの邸やしきは、大変な騒ぎになりましたが、まだ、正気付いたばかりで、二人の医者が詰め切りで様子を見ている主人あるじの三右衛門には聞かせるわけにいきません。

その中に銭形の平次は、疾風迅雷しつぷうじんちゆうのごとく、仕事を運びました。その晩、第一番に逢つたのは、支配人の禄兵衛、月代の光沢さかざの良い働き盛りの男で、背は高い方、少し氣むつかしそうですが、その代り堅

いのと正直なのが看板で、家中の者が一目も二目も置いております。

「銭形の親分、あの女が殺されては、さしむき主人の世話を焼く者がありません。幸い、少しずつ正氣付いて来るようですが、お町はどうした、なんて聞かれたら、返事のしようがないだろうと、心配していますよ」

支配人らしい行届いた心配です。

「番頭さん、この下手人はどうも家の中の者らしい。御主人があの様子だから、多分、相続争いに絡んだことじゃありませんか」

「へエ、——そんなことが」

禄兵衛も否定はしませんが、ひどく酸っぱい顔をしております。

「で、お町さんが殺されて、さしむきお困りなら、どうでしょう、私の手から一人女を入れたいんだが」

「と言うと?——」

「そう言つちや濟まないが、番頭さんはお店が忙しくて奥へは目が届かないだろうし、私も毎日来て

いるわけにもいきません。幸い、本所の御用聞で、石原の利助親分の娘のお品さん、これは出戻りだが、縹織も才智も人並みすぐれて、こんなことには打って付けの女です。お町さんの代りに、ただの奉公人という触込みで七日でも十日でも、ここへ置いてやっちや下さいますまいか」

平次の頼みは尤もでした。こんな大家に起つた事件の解決を、外から、医者が脈を引くようにしていったんでは、いつになつて解決するかわかりそうもなかったのです。

「それは構いませんとも、早速連れて来て下さい。家の中に親分方の息のかかつた方が居なざると、私達もどんなに心丈夫だかわかりません。なにぶんこの節は、嫌なことばかりありますんでね——いや、これは私の口から申上げることではない」

禄兵衛はフツと口を嚙みました。

「ところで番頭さん、この剃刀は、この家の品じゃありませんか」

平次は懐中から、キリキリと手拭に巻いた剃刀を取出し、禄兵衛の手へ渡してやりました。柄も刃も

よく拭き込んであるので、もう血の痕などは容易に見付かりません。

「へエ、——これは、見覚えがありませんネ。誰のだっけ、何しろ大勢のことですから、忘れてしまいましたが、柄にこんな器用な細工をする者は、たんとは居りません。ちよいと待つて下さい」

禄兵衛はそう言いながら、通りすがりの下女を呼び入れて、剃刀を鑑定させました。

「お嬢さんのだアよ、番頭さん。家中で一番よく切れる剃刀じゃねえか」

相模訛さがみなりの下女は、何の遠慮もなくそう言つて、アタフタとお勝手へ行つてしまいます。

「お嬢さんと言つと?——」

「亡くなつたお内儀かみさんの遠縁この者で、此家の養い娘ですよ」

「その娘さんに逢わせて頂きましようか」

五

平次は間もなく、養い娘のお縫の部屋に案内されました。

十九と聞きましたが、境遇のせいとか、年よりはふけて、二十二三と言つても通るでしょう。少し陰気な感じですが、素晴らしい美人で、何となく藪蔭やぶかげに咲き誇つてゐる月見草を思わせる娘でした。

「お嬢さん、御免下さい」

「……………」

お縫はなんと挨拶していいか、見当も付かない様子で黙礼しました。

「この剃刀はお嬢さんなのでしょうね」

「え」

「お町が殺された場所にあつたんですが」

「エッ」

見る見るお縫の顔は真つ蒼になりました。唇からサツと血の気が失せると、眼を大きく見開いて、頬の肉が、いたましい痙攣けいれんを起します。

「しばらくお預かりしますよ、お嬢さん」

「……………」

「今晚、御飯が済んでから、どこかへ出かけません

か」

と改めて平次。

「え、どこへも」

「奉公人達は、しばらくの間、お嬢さんを見掛けなかつたと言いますが、どこに居なすつたんです」

「ここに居りました」

「ここに？」

「え、私はどうかすると、半日ぐらい、誰にも逢わずにここに居ることがあります」

もうこれ以上は訊くこともなかつたでしょう。

「お邪魔でした。お嬢さん、お寝みなさいまし」

番頭の緑兵衛を顧みて、今度は店の方へ。

「ね、親分、あのお嬢さんは、人などを殺せるような人間じゃありません。剃刀はお嬢さんのでも、これは私が請合いますよ、誰かお嬢さんの剃刀を持出した奴があるのでしよう」

「さア」

平次はそれには肯定も否定も与えませんでした。

間もなく、番頭の部屋を借りて、呼び出して貰つ

たのは、主人の甥の世之次郎。

「へエ、今晩は、御苦勞様で」

店で働いているだけに、如才じよさいのないことはお縫と反対で、敷居際に手を突いて、支配人と平次の顔を等分に見上げました。

小作りで、年の頃二十五六、少し三白眼しろめですが、色の浅黒い、なかなかの男前、なんとなく軽捷けいしやうで抜け目のなさそうな人間です。

「世之次郎さんと言いましたね」

「へエ」

「御主人に万一のことがあると、総領が勘当されていなさるそうだから、お前さんが跡取りというわけかネ」

平次は妙に立ち入ったことをツケツケ言います。
「とんでもない、親分。そうでなくてさえ、世間の口がうるさくてかありません。そんなことはどうぞおつしやらないように願います」

「まあ、いいやな、お前さんは運がいいんで。それはそうと晩飯の後でどこへも出なさりはしまいネ」
「今晩ですか？」

「お町が殺された刻限に、お前さんはどこに居な

すったか訊きたいんだ」

平次の舌は、恐ろしく辛辣しんらつです。

「へエ、——お町は戌刻いっくつ(八時)少し前に殺されたつて話ですから、その時分私は町内の銭湯へ行つていましたよ」

「銭湯? 此家こじでは風呂は立ちませんか」と平次。

「ありますよ。雇人が入るんで、毎晩立ちますが、私は疝性かんしょうで、流しの広い、上がり湯のふんだんにある銭湯でないと、入ったような気がしません」

「なるほど」

「私が内風呂へ入らないのは、家中の者が皆んな知っております」

「それにしても、宵から銭湯は、遠慮がなさすぎはしませんか」

「へエ」

主人の甥というにしても、店の者としては少し我儘わがままが過ぎるようです。

「何刻なんどきぐらい入っていましたか」

「一刻(二時間)とも入りはしません」

「そんな長湯ですか、お前さんは?」

「へッ、少し稽古事きこじをしているもんで」

「なるほど」

小唄の師匠へ行つて、一刻も変な声を出して唸うなつて、帰りには手拭てぬぐいを濡ぬらして、銭湯へ行つたような顔をするというのは、その頃の大商人の奉公人にはよくあることでした。

これは銭湯と、町内の稽古所を調べさえすれば判ると思つたのでしよう。平次はそれつきりにして、あとは店中の奉公人、一人一人に逢つてみました。が、さて、何の手掛りもありません。

六

平次と一時張合つて、近頃はすっかり折れてしまつた本所の御用聞、石原の利助の娘、お品——まだ二十二で、平次の女房のお静とは仲好しの美しいお品——は翌ある日、支配人禄兵衛の手で、石井家へ入り込みました。

表向きは殺されたお町の代り、病人の世話をす
るといふ名義ですが、実は、お縫や世之次郎をはじ
め、雇人全部を見張るため、お品の骨折りも一通り
ではありません。

主人三右衛門は、幸い翌る日あたりから、少しず
つ意識を恢復かいふくして、お品が行つてから三日目には、
お町の居ないのを不思議そうに物問いたげな顔をす
ることもありました。

朱塗しゅぬりの筐はこは、騒ぎが一段落済むまで平次が預か
り、親の三右衛門がお町に大事を託した心持をくん
で、勘当された倅せがれの三之助を石井家へ入れてやろう
としましたが、これは番頭の禄兵衛が強硬に反対し
て、沙汰止みになりました。

三之助は無法者で、飲む買う打つの三道楽の外
に、親の金を持出して、やくざな仲間にするのを楽
しみにしたくらいの人間ですから、——親旦那の思
召しはさることながら、この家に入れたら、どんな
ことをするかもわからないと、禄兵衛は言うので
す。それに、相続争いが、深刻になつているから、
お縫や世之次郎と血で血を洗うような三つみつ巴よこの醜みにくい

争いが始まるに相違ない、かたがた三之助を呼び戻
すのは、もう少し待つて貰もらいたいと言う言葉にも理
窟くつがあります。

平次も、しばらくその意見に任せて、成行きを見
ました。が、お町を殺した下手人はどうしても判ら
ず、桐の空箱の行方もそれつきりわかりません。

三日目に、番頭の禄兵衛は、店で紙入を紛失しま
した。縫いつぶしの見事なものでしたが、中には幾
らも入っていないから、騒ぐまでもあるまいと、自
分の胸に畳んでおくつもりらしい様子でしたが、そ
んなことは知れ易いもので、半日経たないうちに、
店中で知らないものはない有様でした。

五日目に、お品は家へ帰りました。平次へ一通り
報告した上、父親の利助が、とかく身体が勝すぐれない
ので、それを一晩見てやるためでもあったのです。

全く三右衛門はこの二三日ことのほか快く、時々
は廻らぬ舌で物さえ言うようになったので、この様
子で三廻りもすれば、元の身体にはならなくとも、
時々帳尻ぐらいいは見られるようになるだろうとい
うほどになりました。

その晩、主人の部屋に泊つたのは、相模女のお村、始めのうちは、大きい眼を開いて、看護るつもりでしたが、次第に猛烈に睡気に襲われると、我にもあらず、健康な軀をかいて寝込んでしまいました。

眼の覚めたのは翌る朝、窓を開けて、朝の光と空気をに入れて見ると、主人の三右衛門、頸に赤い細紐を巻かれたまま、少し乗り出し加減に、眼を剥いて死んでいたのです。

「ワツ、た、助けてくんろツ」

お村は四ん這いになつて飛出しました。

恐ろしい不安を孕んだ、ハチ切れるような騒ぎが、猛火の土の鍋を沸らせるように、家の中を煮えくり返らせました。

「誰もここへ入るんじゃないぞ。お前は銭形の親分を呼んで来い。お前は医者だツ」

支配人の禄兵衛が、たつた一人でてんてこ舞をしていると間もなく、銭形の平次、自分のガラツ八をつれて飛んで来ました。

続いて、お品、町内の医者、町役人、家の中はただもうごつた返します。

「銭形の親分、申し訳がありません。たつた一晚の油断で」

お品は面目なげに言うど、

「なアに、私はこうなることを見通していたんだ。お品さんが一年泊つていりやア、三百六十六日目にこの家の旦那がやられるよ」

「エツ」

「お品さんは証拠固めるとき役に立つんだ。安心していなさるがいい」

平次はお品を慰めておいて、変事のあつた部屋へ行きました。

七

「あツ、親分待つていました」

入口に頑張つていたのは、支配人の禄兵衛。

「番頭さん、大変なことになりましたね」

「どうしていいか、私には見当も付きませんが、とにかく、ここへは、親分が見えるまで、誰も入れな

いつもりで頑張っていましたよ」

「それは有難い、早速見せて貰いましょうか」

平次は部屋の中へ入って行きました。中風に当たった半病人ですが、末期まつごの苦しみはさすがに物凄く、物馴れた平次も思わず顔を反そむけます。死人の頸に巻いたのは、皮肉なことに、同じ部屋に居眠りしていたお村の赤い細紐で、蒲団ふとんの裾の方には、立派な縫つぶしの紙入が一つ落ちております。

拾い上げて見ると、中には小粒が少々と、鼻紙だけ。

「この紙入は誰なのでしょう」

平次がそれを持って部屋から出ると、

「あッ」

一目、番頭の禄兵衛が飛上がりました。雇人達は顔を見合わせるばかり、口を利く者もありません。

「番頭さんが二三日前に失なくしなすった紙入というのは、それじゃございませんか」

とお品。

「え、そ、そうですよ。どうして一昨日おとといなくなつた私の紙入が、そんな所に落ちていたんでしよう」

禄兵衛は齒の根も合いません。

「番頭さん、中を改めて下さい。中味に変わりはありませんか」

と平次。

「……………」

禄兵衛は黙って紙入を取上げましたが、一通り中をあつた検めて、

「紙一枚、小粒一つ無くなってはいません」

まじまじと頸を捻ねっております。

「番頭さん、心配には及びません。これはお前さんを罪に落そうとする術てですよ。幸いこの紙入が三日前になくなつたことは、大勢の人が知っているようだし、それに——」

平次は部屋に入ると、主人の死体の頸に巻付いた赤い紐を解いて持つて来ました。

「この紐で殺したようには見せかけているが、それも細工で、こんな細い紐で、人間一人殺せるわけはありません。——この通り」

平次は両手へ紐を絡んで引くと、小布こぎれを縫こしらって拵こしらえた赤い紐は何の苦もなく、灯心のようにフツと切

れます。

「あッ」

驚き騒ぐ人々を尻目に、平次はもう一度主人の死体のところへ帰って行きました。

「御覧の通り、頸には、絞め殺した時の紐の跡が付いているが、それで見ると、刀の下げ緒か前掛の紐か、——とにかく、恐ろしく丈夫な一風編み方の変った真田紐だ」

「……………」

皆んなはもう一度顔を見合せました。

「番頭さん、濟みませんが、この部屋の隣は納戸になつてゐるようだが、戸の隙間から変なものが見えますよ、拾つて来て下さい」

番頭の禄兵衛は黙つて隣の納戸へ入りましたが、不気味そうに手へブラ下げて来たのは、焦茶色の丈夫な真田紐、いや丈夫な真田紐の付いた手代の使う前掛です。

「あッ、世之次郎さんのだ」

誰かがとうとう口を滑らせました。

「八」

平次が一つ目くぼせると、ガラッ八は飛鳥のごとく、世之次郎の背後へ廻りました。

「野郎ッ、騒ぐな」

手頸に絡むのは、蛇のような捕縄。

「あッ、俺は、俺は何にも知らない」

世之次郎は、あまりのことに、驚くことも忘れたように、口を開いて茫然と立ち尽しました。

「紙入や赤い紐の細工は器用だが、さすがに叔父を殺した自分の前掛を持つて行くほど胆が太くなかつたんだな、罰当りな奴だ」

妙な破目になつた禄兵衛は、主人筋の世之次郎へ、掴みかかりそうな様子を見せません。あまりのことに腹を据え兼ねたのでしよう。

それから十日目、石井一家の騒ぎに係した者は全部八丁堀の吟味与力、笹野新三郎の役宅に呼出されました。

本當の調べは、町奉行でやることにはなつておりますが、大岡越前守とか、遠山左衛門尉とかいう、後世までも聞えた名奉行はともかく、大抵のお白洲

では、筋書通りそれを繰り返して口書拇印くちがきぼいんを取り、最後の言い渡しをするだけであつたのです。

幕末の奉行などは自分で罪人を調べた者はほとんどなく、与力も調べの出来るのは余程の傑物えらもので、大抵は岡っ引ひが引つ叩きたたながら調べ、お白洲は型だけのものであつたとさえ言われております。

この日、笹野新三郎の前に呼出されたのは、石井の支配人禄兵衛、三右衛門の甥世之次郎、これは伝馬町の仮牢から伴つれて来た縄付のまま、それに養い娘のお縫、勘当されていた倅の三之助、下女のお村、それに銭形の平次と、八五郎のガラツ八と、利助の娘のお品が加わりました。

「平次、お前の望み通り、ここへ皆んな集めたが、いったい何を訊こうというのだ」

笹野新三郎、何か期待するような調子で、微笑を浮かべながら一同を見廻しました。

「へエ、この石井三右衛門一家の騒動は、ひどく手古摺てこずらせましたが、漸よやく目鼻が付きました。順序を立てて申上げると明神裏でお町を殺したのは、あれは世之次郎ではございません」

「何？」

新三郎も少し予想外の様子です。

「あのとき世之次郎は、銭湯へ行つたような顔をして、町内の小唄の師匠のところへ行つて、黄色い声を張り上げていたことは、大勢の証人があつてたしかでございます」

「フーム」

「それに、死骸の傍そばに落ちていた剃刀かみそりは、一度血を拭いて、改めて思い付いて捨てたもので、あれは、余程悪賢い奴のやつたことでございます」

「……………」

「お縫でないことは、わざわざ自分の剃刀を捨てて来たのでも解ります。第一お縫は、お町と仲が悪かつたそうで、背後うしろから肩へ手を掛けて、馴れ馴れしく剃刀を喉へ廻されるまで黙っているはずもなく、それに、下手人が女でないことは、八五郎が見て知っております。背の高い低いなどは、ほんのちよつとの間ならどうにでも誤魔化ごまかせます」

「なるほど」

「それから、主人の三右衛門を殺したのも、世之次

郎ではございませぬ」

「エッ」

平次の話の途方もなさに、新三郎始め、庭先に列ならんだ一同思わず声を出しました。

「三日も前から、番頭の紙入を盗んで、それを証拠にしたというのは、少し細工が過ぎます。紙入を盗めば騒がれるに決っておりますから、そんなものは証拠になりませぬ」

「……………」

「それほど細工の上手な世之次郎なら、何もわざわざ自分の前掛で、叔父を絞め殺すようなことをするまでもないはずです。紐や縄はどこにでもあります。——その真田紐を、覗けば見えるような隣の部屋へ抛ほうり込んで、灯心のように弱い赤い紐なんかを巻いておくのも細工が過ぎて本当らしくありません」

「なるほど、理窟だな」

新三郎もすっかり引入れられました。

「私がお品さんをあの家へ入れておいたのは、下手人がお品さんに見せようと思つて、どんな細工をす

るか、それが知りたかつたのです」

「それだけ解つているなら、どうして無実の世之次郎を縛つて、真実ほんとうの下手人を逃がしておいたのだ」

笹野新三郎は、改めて平次に訊ねました。

「それは旦那、下手人に油断させて、尻尾を出させたかつたからでございませぬ。そうでもしなければ、私の腹の中で見当を付けているだけで一つも証拠というものがありません。世之次郎には気の毒ですが、叔父の敵討のために苦勞したと思つて、あきらめて貰うより外に仕方がありません」

「その証拠は何だ、下手人は誰だ」

「もう申上げるまでもないようです。あの顔を御覧下さい」

ハツと思つと、平次に指された支配人の禄兵衛は、立ち上がつて庭口へ逃げようとしているのでした。

「逃げるのか、野郎ッ」

飛付いたガラッ八、力だけは二人前もあります。

あツという間に禄兵衛を叩き伏せ、犇ひしひし々と縛り上げてしまいました。

「あの野郎です。店から現金で一万両も持出して、
 妾を二人も囲つておりました。三右衛門が丈夫に
 なつて、帳尻を見たらひとたまりもありません。そ
 れに、三右衛門が死んで、世之次郎を罪に落せば、
 総領の三之助は人別を抜かれておりますから、あと
 はお縫一人、あの大身代が支配人の自由になりま
 す。朱い手篋の証文を、三之助へやるまいとしたの
 も、つまりは行く行く自分のものにするつもりだつ
 たのでございます」

平次の説明は疑いを挟む余地もありません。

「そうか、太い奴があるものだ。すぐ口書を取つ
 て、奉行所へ引いて行け。皆の者、御苦労であつた。
 別して世之次郎は気の毒だ。三之助が跡目相続済ん
 だ上は、よく世話をしてやるがいい」

笹野新三郎はこう言つて立上がりました。平次に
 は別に褒め言葉もありませんが、平次にとつて、そ
 の優しい眼が、雄弁に手柄を讚美しているので充分
 だつたでしょう。

底本：「銭形平次捕物控（八）お珊文身調べ」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成 16）年 12 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第七巻」中央公論社

1939（昭和 14）年 5 月 25 日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1932（昭和 7）年 11 月号

※副題は底本では、「朱塗の筐《はこ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。